青年期における理想の友人関係と対友人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響

松 田 常 美

問 題 と 目 的

1 友人関係の理想と現代青年に特徴的な友人関係のあり方

青年期において友人との関わりは重要なものである。児童期までの両親への精神的依存状態から脱却して心理的に独立しようとする中で，友人が重要な他者としての役割を果たすようになっていく（浮谷，2000）。従来，友人関係のあり方は，青年期の初めには物理的距離の近い者との関係であったものが，アイデンティティ形成と関連して自分と似た者を友人として望むようになり，やがて自分と違っていてもお互いをよく理解し合える心理的距離の近い者との関係に限定されていくようになるといわれていた。青年期において友人関係で満たされることは，自尊心を高めたり，社会的・情緒的な適応に重大な影響を及ぼしている。そのため，青年たちは友人を選択するときにどのような関係を築きたいかということの期待を持っていると考えられる。近年，友人との深い関わりを回避して友人関係が表層化しているにも関わらず友人に対する満足度は高いということもいわれているが，友人関係に対する期待の内容が変化しているというわけではないようである。鈴木ら（1998）は大学生を対象として，友人に対する期待と実際の友人関係への満足度との関連を調査している。それによると，青年たちは友人に関して「受容性」「社交性」「自立性」「類似性」「主導性」の期待をしており，特に友人に悩み事を相談できることや喜びや悲しみを分かち合えるといったような「受容性」は友人関係を結ぶ上でかなり普遍的で重要なものであるといえる。また，梅本（1988）も女子大学生を対象として，友人に対する期待と現実の友人との関連を調査している。それによると，女子青年たちは友人に対して強い絆を持ち，深く内面に関わった関係を求めており，現実に親しくしている友人はこれらの期待によくあてはまる人であると認識されている。

しかし近年，友人との深い関わりを避け，傷つけあわないように気を遣ったり，その場の楽しさだけを追求するような関係を持つ傾向がしばしば指摘されている。岡田（1995）は，大学生を対象に友人関係に関する調査を行ったところ，友人関係の特徴として互いに傷つけあわぬように気を遣う「気遣い」，互いの領域に踏み込まぬように関係の深まりを回避する「ふれあい回避」，楽しさを追求して群れる「群れ」といった3側面を見出している。このように，青年たちの中には期待している友人関係と現実に築いている友人関係に差異がある者もいるのではないかと考えられる。

2 友人に対する不安感情

角尾（2003）は，対人不安意識尺度を基にして対人不安傾向の再検討を行った結果，不特定の他者に対する不安傾向とは異なるものとして，特定の他者（友だちや仲間）に対する不安傾向を捉えることができるのではないかと考察している。また，岡田（2002）は，大学生における「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連について調査している。それによると，「対人恐怖的傾向」と「ふれ合い恐怖的心性」は人との深い関係の中で恐れる内容は同じであるが，回避の方法が違うとして区別しており，「ふれ合い恐怖的心性」は心情的に近い他者との場面でより不安を感じ，深い関わりを避けるといっている。このように，よく知っている友人に対して起こる不安感情もあり，その不安感情が友人関係の期待と現実の差異に関係しているのではないだろうかと考えられる。

榎本（1999, 2000）は，中・高・大学生を対象として，青年期における友人関係の内容をいくつかの側面に分け，それらの関連を調査している。それによると，友人関係の質は感情的側面，欲求の側面，活動的側面がある。友人に対する感情は，発達的に強さの変化はなく，特に「信頼・安定」と「不安・懸念」の感情は友人に対するすべての欲求に関わっている。ま

た，欲求の側面では，「同調欲求」は前青年期頃に高まり，高・大学生になると「相互尊重欲求」が高くなるといったような年齢的な変化も見られるが，青年期を通して「親和欲求」はすべての友人との活動には関わっている。このように彼らは友人に対して安心している部分と不安を感じている部分の両方を感じつつも仲良くしたいと思い，友人と関わっている。また，角尾（2004）は特定の他者に対する不安傾向をさらに検討しており，不安が喚起される二者関係の分析を行った結果，「友だち」は不安を喚起する関係でもあり，リラックスできる関係でもあることを見出している。その際，「友だち」に対して不安を感じる時として，関わりを持とう，会話をしようと試みる時が示されている。対友人不安感情は実際に友人と関係を持つことと関連して起こる不安感情ではないかと考えられる。

杉浦（2000）は「拒否不安」と「親和傾向」という友人に対する2つの親和動機と対人的疎外感との関係を調べるために，中・高・大学生を対象に調査を行っている。親和動機の1つである「拒否不安」は，友人と仲良くしたいが，自分を見せると嫌われてしまうのではないかという葛藤の中で起こるのではないかと考えられ，孤独感や理解されていないといった対人的疎外感と正の関係が示されている。また，松島（2000）は自己開示と友人関係について検討するために専門学生を対象に調査を行っている。それによると，青年たちは「開示相手への気遣い」と「開示することによる自分に対する影響」という2つの抵抗感から友達に関する問題や自分自身の問題は話しにくいと感じている。「開示相手への気遣い」とは「人間関係がぎくしゃくするのが嫌だから」，「話が暗くなりそうだから」などの抵抗感で，自己開示することによって友人とは関わりたいけれども，人間関係を壊さないように，常に相手に気を遣って行動しているということがいえる。「開示することによる自分に対する影響」とは「周囲がどう自分を見るか心配だから」，「言ったらどのように思われるかと思うと言えない」などの抵抗感で，自己を受容する過程にある青年にとって，たとえ親しい友人に対してであっても，自分でも認めたくないような感情や気持ちを打ち明けるというのは大変困難なことであると考えられる。

このように，青年たちは友人に対しても様々な不安感情を抱いていると考えられるが，友人に対する不安感情についての質問紙はまだ作られていないようである。そこで，松田（2003）は対友人不安感情に関する質問紙を作成し，中学生の対友人不安感情と友人関係の関連を検討するために調査を行った。その結果，中学生が友人に感じている不安感情は「拒否に対する不安」と「不調和に対する不安」であった。この2つの友人に対する不安感情を松島（2000）と照らし合わせてみると，「拒否に対する不安」は「開示することによる自分に対する影響」，「不調和に対する不安」は「開示相手への気遣い」に関連していると考えられる。松島（2000）の2つの抵抗感を参考にすると，松田（2003）の対友人不安感情以外にも，さらに「その人が不快ではないかと思うから」など相手を傷つけてしまうことへの不安や「自分の弱いところを見せたくない」，「はずかしい」など自分の全てを相手に見られてしまうことへの不安なども考えられるのではないだろうか。

3　本研究の目的

このように，青年たちは友人関係に対する理想を抱いているが，友人に対する不安感情が影響して，現実には理想どおりの友人関係を築けていないのではないだろうかと考えられる。先行研究により，友人に対する不安感情があるということは明らかになっているが，どのような内容の不安感情を抱いているのかということについてはまだあまり研究されていない。青年期の友人関係について考えるためには，友人に対する不安感情がどのようなものであるかを知ることも必要であると考えられる。松田（2003）による対友人不安感情の質問紙は不十分な部分があると考えられるため，本研究では引用文献などを参考に項目を増やし，より多面的に友人に対する不安感情を測れる尺度を作成する。

さらに，松田（2003）によると，中学生が友人に対して抱きやすい不安感情は性別によって種類が違っており，男子は友人から拒否されることに対して，女子はグループの和を乱すことに対してより強く感じている。では，この2つ以外にも考えられる不安感情は，性別によってどのような感じ方の違いがあるのであろうか。また，年齢による不安感情の違いはどのようなものであろうか。本研究では，友人に対する不安感情について，以上のような点からさらなる検討を行う。また，現実には理想と異なる友人関係を築いている要因となるものは色々あるであろうが，友人との関係性の中で考えられる要因として，理想の友人関係と友人に対する不安感情が現実の友人関係へどのような影響を及ぼしているのかということを検討する。

仮　説　1

対友人不安感情は松田（2003）の「拒否に対する不安感情」と「不調和に対する不安感情」だけではなく，松島（2000）の自由記述による調査で回答されている，‘その人が不快ではないかと思うから話せない’のような「相手を傷つけてしまうことに対する不安感情」や，‘自分の弱いところを見せたくない’のような「自分の全てをさらけ出すことに対する不安感情」もあるのではないか。

予　備　調　査

「拒否に対する不安」,「不調和に対する不安」,「相手を傷つけてしまうことに対する不安」,「自分の全てをさらけ出すことに対する不安」の4因子を想定して，松田（2003）の対友人不安感情尺度に引用文献などを参考にして新たな項目を加えた。この尺度に関して項目の弁別力や因子のまとまりを検討するために，2006年10月に関西の中学生3学年を対象に予備調査を実施した。回収数は男子53名（1年16名・2年18名・3年19名），女子55名（1年19名・2年19名・3年17名）の計108名で，回収率は100%であった。有効回答数は，そのうち記入漏れや重複回答などの無効9名を除いた，男子49名，女子50名の計99名で，有効回答率は91.7%であった。

1　質問項目

・対友人不安感情尺度

引用文献や卒業論文で使用したものをあわせて作成した対友人不安感情に関する29項目からなる質問紙を使用し，5件法（とてもあてはまるから全くあてはまらない）で回答を求めた。

・岡田（1995）の作成した友人関係尺度

友人とのつき合い方に関する17項目からなる質問紙を使用し，理想の友人関係・現実の友人関係（実際の友人の中で親しいと思っている人を想定してもらう）の2パターンを5件法（とてもあてはまるから全くあてはまらない）で回答を求めた。

2　結果

対友人不安感情尺度29項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は10.122, 2.212, 1.669, 1.424, 1.337…というものであり，スクリープロットを見ると，第3因子と第4因子までの傾きが大きく，第4因子以降の傾きが小さくなっていることから，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，絶対値.4以上の因子負荷量を示さなかった‘自分の弱いところを見せたくない’,‘どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない’,‘友だちからの遊びの誘いを断ったら，もう誘ってもらえないかもしれないと思う’,‘本当の気持ちを打ち明けたとき，友だちにどう思われるかこわい’,‘いつも一緒にいないと友だちが離れていってしまいそうでこわい’,‘自分の性格や好みを知ってもらわないと友だちになれない気がする’,‘1人でいることで変わった人と思われたくない’,‘相手が暗くなってしまうのではないかと気になる’の9項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転前の3因子での累積寄与率は54.738%であった。第1因子は‘連絡を取るとき，友だちにうっとうしいと思われないか気になる’など10項目からなり，友人から拒否されてしまうことを恐れる「拒否に対する不安」とする。第2因子は‘本当の気持ちと違っていてもつい友だちに合わせようと思ってしまう’など7項目からなり，グループの中で浮いてしまったりグループの和を乱すことを恐れる「不調和に対する不安」とする。第3因子は‘仲間外れにされたくない’など3項目からなり，グループからはみ出してしまうことを恐れる「疎外に対する不安」とする。

この結果を基に，弁別力のない項目やどの因子にもあてはまらなかった項目のうち7項目を削除した。また，削除対象であったが，予備調査時にことばや文章の意味がわからないと指摘を受けた項目‘どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない’,‘相手が暗くなってしまうのではないかと気になる’については，文章を修正し，もう一度項目として加えた。

仮　説　2

①松田（2003）によると，「拒否に対する不安」は男子，「不調和に対する不安」は女子のほうが高い。グループからはみ出してしまうことへの不安である「疎外に対する不安」は相手から拒否されることを恐れている男子のほうが女子よりも高いのではないか。

②榎本（2000）によると，友人に対する欲求の中の「同調欲求」は中学生において高い。群れの中での調和を意識するような，グループの和を乱すことへの不

安である「不調和に対する不安」や，グループからはみ出してしまうことへの不安である「疎外に対する不安」は高校生よりも中学生のほうが高いのではないか。

③杉浦（2000）によると，「拒否不安」は，友人と仲良くしたいが，自分を見せると嫌われてしまうのではないかという葛藤の中で起こる。「拒否に対する不安」が高い者ほど，理想よりも深く関わるつき合い方をしにくくなるのではないか。また，より一層友人に対して気遣うつき合い方をしているのではないか。

④「不調和に対する不安」，「疎外に対する不安」が高い者ほど，グループに所属していることや，そのグループが楽しくあることを強く意識していると考えられる。そのため，深く関わるつき合い方はしにくく，理想よりも一層グループで群れるつき合い方をしているのではないか。

本　調　査

予備調査の結果を基に，因子にまとまらなかった項目の削除や，分かりにくかった文章の訂正などの修正を行い，仮説検証のために調査を実施した。

1　調査対象者

関西の中学生，高校生それぞれ3学年を対象に実施。回収数は中学生男子152名（1年47名・2年50名・3年55名），中学生女子155名（1年55名・2年53名・3年47名）の計316名，高校生男子114名（1年93名・2年14名・3年7名），高校生女子135名（1年82名・2年25名・3年30名）の計251名，合計567名で回収率は100%であった。有効回答数は，そのうち記入漏れや重複回答などの無効名を除いた中学生男子126名（1年43名・2年40名・3年43名），中学生女子146名（1年53名・2年49名・3年44名）の計272名，高校生男子106名（1年86名・2年13名・3年7名），高校生女子129名（1年76名・2年24名・3年29名）の計235名，合計507名で有効回答率は89.4%であった。

2　実施時期

2006年11月～12月

3　質問項目

①対友人不安感情尺度

引用文献や卒業論文で使用したものをあわせて作成した対友人不安感情に関する29項目から，予備調査によって7項目を削除した22項目の質問紙を使用し，5件法（とてもあてはまるから全くあてはまらない）で回答を求めた。

②岡田（1995）の作成した友人関係尺度

友人とのつき合い方に関する17項目からなる質問紙を使用し，理想の友人関係・現実の友人関係（実際の友人の中で親しいと思っている人を想定してもらう）の2パターンを5件法（とてもあてはまるから全くあてはまらない）で回答を求めた。

4　手続き

クラスの担任教諭に協力してもらい，各クラスのホームルーム時間内に配布・実施・回収を行った。担任教諭には，まずフェイスシートにある教示文を読んでフェイス項目への記入を促し，その後各ページで質問する内容を伝えていただいた。

結　　果

1　対友人不安感情尺度の分析

対友人不安感情尺度について，中学生，高校生に分けてそれぞれ因子分析を行った。その後，それぞれの因子の特徴を比較するために，各因子の平均項目得点を用いて分散分析を行った。

①中学生の対友人不安感情尺度の分析

中学生の対友人不安感情尺度22項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は8.536, 2.073, 1.310, 0.940…というものであり，第3因子までが固有値1以上であるため，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，絶対値.4以上の因子負荷量を示さなかった‘友達とはいつも同じ考えだと思われたい’，‘はっきり自分の意見を言わないと友だちの中で存在感がなくなりそうでこわい’，‘本当の気持ちと違っていてもつい友だちに合わせようと思ってしまう’，‘沈黙が続くと相手がつまらないかもしれないと落ち着かなくなる’の4項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転前の3因子での累積寄与率は57.618%であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表1に示した。第1因子は‘友だちに秘密にしていることがあると仲良しじゃないと思われてしまいそうでこわい’など7項目からなり，グループの和を乱すことを恐れる「中学生の不調和不安」とす

表 1　中学生における対友人不安感情の因子分析（Promax 回転後の因子パターン）

		1	2	3	共通性
15	友だちに秘密にしていることがあると仲よしじゃないと思われてしまいそうでこわい	**0.802**	−0.038	−0.120	0.516
17	相手が暗くなってしまうのではないかと気になる	**0.684**	0.060	0.008	0.512
16	連絡を取るとき，友だちにうっとうしいと思われないか気になる	**0.575**	−0.125	0.281	0.536
18	みんなと違うことはしたくない	**0.567**	0.393	−0.256	0.426
13	長時間友だちのそばにいると自分のいやな面を知られるかもしれないと不安になる	**0.502**	−0.059	0.270	0.461
14	相手との関係がぎくしゃくするのがイヤでできないことがある	**0.491**	0.022	0.272	0.503
11	遊びに誘うとき，断られるかもしれないと気になる	**0.458**	−0.067	0.274	0.405
20	仲間外れにされたくない	−0.049	**0.836**	0.003	0.670
9	できるだけ敵は作りたくない	0.009	**0.762**	−0.056	0.541
22	誰からも嫌われたくない	0.059	**0.749**	−0.113	0.513
4	友だちとの話題についていけなくなるのはいや	−0.059	**0.493**	0.351	0.507
3	どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	−0.085	**0.479**	0.325	0.443
2	話しかけるとき，ちゃんと返事をしてくれないかもしれないと思ってしまう	0.048	−0.153	**0.734**	0.482
6	自分が楽しいことでも，相手は楽しくないかもしれないと不安になる	−0.070	0.151	**0.711**	0.577
8	でしゃばりすぎると友だちの反感をかうと思う	−0.083	0.126	**0.635**	0.436
7	自分の本心をさらけ出しても，真剣に答えてもらえない気がする	0.148	−0.142	**0.578**	0.380
19	自分が本当に友だちと思われているか気になる	0.170	0.223	**0.456**	0.528
1	友だちと一緒に盛り上がっていないとかげぐちを言われてしまう気がしてこわい	0.156	0.154	**0.454**	0.439
因子間相関	2	0.404			
	3	0.642	0.542		
α		0.843	0.832	0.828	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a　7 回の反復で回転が収束しました。

表 2　高校生における対友人不安感情の因子分析（Promax 回転後の因子パターン）

		1	2	3	共通性
6	自分が楽しいことでも，相手は楽しくないかもしれないと不安になる	**0.751**	0.127	−0.241	0.433
16	連絡を取るとき，友だちにうっとうしいと思われないか気になる	**0.749**	−0.156	0.094	0.592
7	自分の本心をさらけ出しても，真剣に答えてもらえない気がする	**0.680**	−0.174	0.099	0.491
17	相手が暗くなってしまうのではないかと気になる	**0.634**	−0.125	0.047	0.397
19	自分が本当に友だちと思われているか気になる	**0.619**	0.059	−0.003	0.412
8	でしゃばりすぎると友だちの反感をかうと思う	**0.565**	0.139	−0.069	0.340
14	相手との関係がぎくしゃくするのがイヤでできないことがある	**0.502**	0.110	0.005	0.310
11	遊びに誘うとき，断られるかもしれないと気になる	**0.477**	0.089	0.103	0.355
2	話しかけるとき，ちゃんと返事をしてくれないかもしれないと思ってしまう	**0.473**	−0.161	0.420	0.586
21	何も喋らないでいると相手がつまらないかもしれないと落ち着かなくなる	**0.444**	0.350	−0.115	0.344
20	仲間外れにされたくない	−0.016	**0.767**	−0.031	0.560
9	できるだけ敵は作りたくない	−0.008	**0.763**	−0.103	0.521
22	誰からも嫌われたくない	−0.101	**0.578**	0.189	0.406
4	友だちとの話題についていけなくなるのはいや	−0.044	**0.430**	0.371	0.428
3	どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	0.169	**0.409**	0.239	0.446
5	友だちとはいつも同じ考えだと思われたい	−0.089	0.018	**0.695**	0.415
18	みんなと違うことはしたくない	0.015	0.057	**0.543**	0.338
1	友だちと一緒に盛り上がっていないとかげぐちを言われてしまう気がしてこわい	0.226	0.112	**0.524**	0.572
因子間相関	2	0.378			
	3	0.694	0.437		
α		0.862	0.786	0.689	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a　5 回の反復で回転が収束しました。

る。第 2 因子は‘仲間外れにされたくない’など 5 項目からなり，グループからはみ出してしまうことを恐れる「中学生の疎外不安」とする。第 3 因子は‘話しかけるときちゃんと返事をしてくれないかもしれないと思ってしまう’など 6 項目からなり，友人から拒否されてしまうことを恐れる「中学生の拒否不安」とする。

学年や性別による特徴を見るために，学年（3 水準）×性別（2 水準）の 2 要因被験者間分散分析を行ったが，どの因子においても有意な差は見られなかった。

②高校生の対友人不安感情尺度の分析

高校生の対友人不安感情尺度 22 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 7.689,

2.256, 1.214, 1.012, 0.957…というものであり，スクリープロットを見ると，第3因子と第4因子までの傾きが大きく，第4因子以降の傾きが小さくなっていることから，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果，絶対値 .4 以上の因子負荷量を示さなかった‘はっきり自分の意見を言わないと友だちの中で存在感がなくなりそうでこわい’，‘本当の気持ちと違っていてもつい友だちに合わせようと思ってしまう’，‘長時間友だちのそばにいると自分のいやな面を知られるかもしれないと不安になる’，‘友だちに秘密にしていることがあると仲良くないと思われてしまうそうでこわい’の4項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。回転前の3因子での累積寄与率は53.239%であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示した。第1因子は‘連絡を取るとき，友だちにうっとうしいと思われないか気になる’など10項目からなり，友人から拒否されてしまうことを恐れる「高校生の拒否不安」とする。第2因子は‘仲間外れにされたくない’など5項目からなり，グループからはみ出してしまうことを恐れる「高校生の疎外不安」とする。第3因子は‘みんなと違うことはしたくない’など3項目からなり，グループの和を乱すことを恐れる「高校生の不調和不安」とする。

性別による特徴を見るために，性別（2水準）の1要因被験者間分散分析を行った。その結果，「高校生の不調和不安」における性別の効果が有意であった（$F(1,233)=7.193$, $p<.01$）。「高校生の不調和不安」は男子のほうが有意に高いといえる。

2　友人関係尺度の分析

友人関係尺度について，高校生・中学生別に理想と現実それぞれの因子分析を行った。その結果，高校生と中学生では因子構造が異なるものであった。その後，それぞれの因子の特徴を比較するために，各因子の平均項目得点を用いて分散分析を行った。

①高校生の理想の友人関係尺度の分析

高校生の理想の友人関係尺度17項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.318, 1.794, 1.556, 1.285, 1.127, 0.951…というものであり，第5因子までが固有値1以上であるため，5因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度5因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果，絶対値 .4 以上の因子負荷量を示さなかった‘必要と思ったときは友達に頼りたい’，‘友だちとの約束は絶対やぶりたくない’，‘自分は我慢しても友だちのためにつくしたい’，‘友だちのためにならないことは絶対したくない’の4項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。回転前の5因子での累積寄与率は68.266%であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表3に示した。第1因子は‘友だちに悩み事を相談したい’など3項目からなり，友人に何でも話したいと思う

表3　高校生における理想の友人関係尺度の因子分析（Promax 回転後の因子パターン）

		1	2	3	4	5	共通性
5	友だちに悩み事を相談したい	**0.912**	0.019	−0.150	0.034	−0.036	0.779
4	友だちに本当の気持ちを打ち明けたい	**0.790**	−0.038	0.057	0.029	0.070	0.605
16	友だちと真剣な内容の話をしたい	**0.487**	0.014	0.150	−0.042	−0.048	0.352
12	友だちとお互いに傷つけあわないようにしたい	−0.078	**0.793**	−0.113	0.023	0.069	0.545
13	友だちの考えていることに気を遣いたい	0.012	**0.597**	0.092	−0.099	0.108	0.323
11	友だちから「つまらない人間」だと思われたくない	0.179	**0.472**	−0.011	−0.015	−0.073	0.347
8	友だちといるとき楽しい雰囲気になるようにしたい	−0.045	**0.403**	0.094	0.130	−0.249	0.390
6	友だちに冗談を言って笑わせたい	0.103	0.044	**0.839**	−0.030	0.066	0.765
3	ウケるようなことをよくしたい	−0.088	−0.044	**0.741**	0.063	−0.050	0.525
10	グループでよく一緒にいたい	0.005	−0.010	0.008	**0.901**	0.036	0.802
1	一人の友だちとばかり仲よくするよりもグループで仲よくしたい	0.033	−0.032	0.032	**0.588**	0.005	0.342
2	友だちとは浅いつきあいしかしたくない	0.054	0.047	0.049	−0.015	**0.693**	0.416
7	友だちとは TV や音楽などの話しかしたくない	−0.089	0.038	−0.057	0.084	**0.565**	0.377
因子間相関	2	0.372					
	3	0.431	0.295				
	4	0.079	0.400	0.162			
	5	−0.417	−0.363	−0.347	−0.114		
α		0.771	0.671	0.762	0.690	0.549	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a　6回の反復で回転が収束しました。

「高校生の深い関わり理想」とする。第2因子は‘友だちとお互いに傷つけあわないようにしたい’など4項目からなり，友人が嫌な思いをしないように気遣おうとする「高校生の気遣い理想」とする。第3因子は‘友だちに冗談を言って笑わせたい’など2項目からなり，友人を楽しませたいと思う「高校生の盛り上げ理想」とする。第4因子は‘グループで一緒にいたい’など2項目からなり，グループで仲良くしたいと思う「高校生の群れ理想」とする。第5因子は‘友だちとは浅いつき合いしかしたくない’など2項目からなり，友人とは当たり障りない会話だけしたいと思う「高校生の浅い関わり理想」とする。

性別による特徴を見るために，性別（2水準）の1要因被験者間分散分析を行った。その結果，「高校生の深い関わり理想」（$F(1,233)=37.612$, $p<.001$）と「高校生の気遣い理想」（$F(1,233)=4.654$, $p<.05$）と「高校生の浅い関わり理想」（$F(1,233)=10.779$, $p<.005$）における性別の効果が有意であり，「高校生の群れ理想」（$F(1,233)=2.902$, $p<.10$）では有意傾向であった。「高校生の深い関わり理想」と「高校生の気遣い理想」は男子より女子のほうが高く，「高校生の群れ理想」と「高校生の浅い関わり理想」は女子より男子のほうが高いといえる。

②高校生の現実の友人関係尺度の分析

高校生の現実の友人関係尺度17項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.439, 2.108, 1.796, 1.312, 1.131, 0.851…というものであり，第5因子までが固有値1以上であるため，5因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度5因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，絶対値.4以上の因子負荷量を示さなかった‘友だちとの約束は絶対やぶらない’1項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転前の5因子での累積寄与率は65.853%であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表4に示した。第1因子は‘友だちに本当の気持ちを打ち明ける’など4項目からなり，友人に何でも話をする「高校生の深い関わり」とする。第2因子は‘友だちの考えていることに気を遣う’など6項目からなり，友人が嫌な思いをしないように気を遣う「高校生の気遣い」とする。第3因子は‘うけるようなことをよくする’など2項目からなり，友人を楽しませる「高校生の盛り上げ」とする。第4因子は‘一人の友だちとばかり仲よくするよりもグループで仲よくしている’など2項目からなり，グループで一緒にいる「高校生の群れ」とする。第5因子は‘友だちとはTVや音楽の話しかしない’など2項目からなり，友人との関わりを表面的なものにとどめる「高校生の浅い関わり」とする。

性別による特徴を見るために，性別（2水準）の1

表4　高校生における現実の友人関係尺度の因子分析（Promax回転後の因子パターン）

		1	2	3	4	5	共通性
4	友だちに本当の気持ちを打ち明ける	**1.013**	−0.081	−0.044	0.013	0.086	0.889
5	友だちに悩み事を相談する	**0.855**	−0.031	−0.080	0.093	−0.014	0.696
16	友だちと真剣な内容の話をする	**0.551**	0.153	0.153	−0.099	−0.072	0.521
9	必要と思ったときは友だちに頼る	**0.538**	0.089	−0.012	0.033	−0.150	0.423
13	友だちの考えていることに気を遣う	−0.074	**0.750**	−0.092	−0.006	−0.023	0.512
12	友だちとお互いに傷つけあわないよう気を遣う	−0.047	**0.688**	−0.060	0.041	0.013	0.445
8	友だちといるとき楽しい雰囲気になるよう気を遣う	−0.057	**0.519**	0.053	0.198	−0.099	0.375
11	友だちから「つまらない人間」だと思われないように気をつける	−0.010	**0.503**	0.046	0.081	−0.059	0.302
15	自分は我慢しても友だちのためにつくす	0.124	**0.489**	0.050	−0.084	0.089	0.285
17	友だちのためにならないことは絶対しない	0.181	**0.476**	0.063	−0.194	0.115	0.316
3	ウケるようなことをよくする	−0.043	−0.025	**0.864**	−0.005	0.053	0.688
6	友だちに冗談を言って笑わせる	−0.006	0.014	**0.805**	0.034	−0.027	0.677
1	一人の友だちとばかり仲よくするよりもグループで仲よくしていたい	0.005	−0.071	0.071	**0.807**	−0.014	0.670
10	グループで一緒にいることが多い	0.075	0.103	−0.048	**0.767**	0.097	0.610
7	友だちとはTVや音楽などの話しかしない	0.021	−0.039	0.068	0.082	**0.824**	0.646
2	友だちとは浅いつきあいしかしない	−0.219	0.109	−0.085	−0.023	**0.497**	0.405
因子間相関	2	0.322					
	3	0.397	0.271				
	4	0.089	0.154	0.217			
		−0.416	−0.203	−0.267	−0.111		
α		0.847	0.745	0.808	0.772	0.629	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法
a　5回の反復で回転が収束しました。

要因被験者間分散分析を行った。その結果，「高校生の深い関わり」（F(1,233)＝28.121, p＜.001）と「高校生の気遣い」（F(1,233)＝7.358, p＜.001）と「高校生の浅い関わり」（F(1,233)＝28.209, p＜.001）における性別の効果が有意であった。「高校生の深い関わり」，「高校生の気遣い」共に男子より女子のほうが高いといえる。また，「高校生の浅い関わり」は男子のほうが高いといえる。

③中学生の理想の友人関係尺度の分析

中学生の理想の友人関係尺度17項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.923, 1.651, 1.618, 1.307, 1.166…というものであり，スクリープロットを見ると，第3因子と第4因子までの傾きが大きく，第4因子以降の傾きが小さくなっていることから，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，絶対値.4以上の因子負荷量を示さなかった‘一人の友だちとばかり仲よくするよりもグループで仲よくしたい’，‘友だちとは浅いつきあいしかしたくない’，‘友だちとはTVや音楽の話しかしたくない’，‘グループでよく一緒にいたい’，‘友だちのためにならないことは絶対したくない’の5項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。回転前の3因子での累積寄与率は59.417%であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表5に示した。第1因子は‘友達の考えていることに気を遣いたい’など6項目からなり，友人に嫌な思いをさせないよう気遣おうとする「中学生の気遣い理想」とする。第2因子は‘友だちに本当の気持ちを打ち明けたい’など4項目からなり，友人に何でも話したいと思う「中学生の深い関わり理想」とする。第3因子は‘友だちに冗談を言って笑わせたい’など2項目からなり，友人を楽しませたいと思う「中学生の盛り上げ理想」とする。

学年や性別による特徴を見るために，学年（3水準）×性別（2水準）の2要因被験者間分散分析を行った。その結果，「中学生の深い関わり理想」における性別の主効果（F(1,266)＝11.156, p＜.001），「中学生の盛り上げ理想」における学年と性別の交互作用（F(2,266)＝3.271, p＜.05）が有意であった。「中学生の深い関わり理想」は男子より女子のほうが高いといえる。「中学生の盛り上げ理想」について，単純主効果の分析を行ったところ，女子における学年の効果（F(2,266＝5.108, p＜.01)）と3年生における性別の効果（F(1,266)＝9.927, p＜.005）が有意であった。Ryan's methodによる多重比較を行ったところ，女子では，1年生よりも3年生のほうが高いといえる。また，3年生では男子よりも女子のほうが高いといえる。

④中学生の現実の友人関係尺度の分析

中学生の現実の友人関係尺度17項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は4.699, 2.002, 1.643, 1.294, 1.145…というものであり，スクリープロットを見ると，第3因子と第4因子までの傾きが大きく，第4因子以降の傾きが小さくなっていることから，3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果，絶対値.4以上の因

表5　中学生における理想の友人関係尺度の因子分析（Promax回転後の因子パターン）

		1	2	3	共通性
12	友だちとお互いに傷つけあわないようにしたい	**0.897**	−0.152	−0.108	0.695
13	友だちの考えていることに気を遣いたい	**0.625**	−0.033	0.057	0.394
14	友だちとの約束は絶対やぶりたくない	**0.478**	0.297	−0.025	0.423
11	友だちから「つまらない人間」だと思われたくない	**0.477**	0.030	0.162	0.304
8	友だちといるとき楽しい雰囲気になるようにしたい	**0.453**	0.066	0.150	0.295
15	自分は我慢しても友だちのためにつくしたい	**0.418**	0.245	−0.017	0.313
4	友だちに本当の気持ちを打ち明けたい	−0.039	**0.865**	0.019	0.732
5	友だちに悩み事を相談したい	−0.164	**0.832**	0.077	0.649
9	必要と思ったときは友だちに頼りたい	0.204	**0.545**	−0.091	0.397
16	友だちと真剣な内容の話をしたい	0.118	**0.493**	−0.078	0.281
6	友だちに冗談を言って笑わせたい	0.033	−0.068	**0.926**	0.550
3	ウケるようなことをよくしたい	0.057	0.038	**0.713**	0.835
因子間相関	2	0.407	0.321		
	3	0.228			
α		0.765	0.778	0.800	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法
a　5回の反復で回転が収束しました。

表 6　中学生における現実の友人関係尺度の因子分析（Promax 回転後の因子パターン）

		1	2	3	共通性
13	友だちの考えていることに気を遣う	**0.830**	−0.116	−0.012	0.620
12	友だちとお互いに傷つけあわないよう気を遣う	**0.733**	−0.092	−0.071	0.483
15	自分は我慢しても友だちのためにつくす	**0.535**	0.183	−0.096	0.384
11	友だちから「つまらない人間」だと思われないように気をつける	**0.533**	−0.069	0.121	0.288
8	友だちといるとき楽しい雰囲気になるよう気を遣う	**0.475**	0.095	0.087	0.297
14	友だちとの約束は絶対やぶらない	**0.447**	0.150	−0.014	0.275
17	友だちのためにならないことは絶対しない	**0.446**	0.218	0.038	0.338
4	友だちに本当の気持ちを打ち明ける	−0.087	**0.907**	−0.028	0.752
5	友だちに悩み事を相談する	−0.075	**0.905**	0.025	0.782
16	友だちと真剣な内容の話をする	0.133	**0.487**	0.038	0.323
9	必要と思ったときは友だちに頼る	0.219	**0.474**	−0.022	0.351
3	ウケるようなことをよくする	0.013	0.013	**0.883**	0.791
6	友だちに冗談を言って笑わせる	0.004	−0.003	**0.882**	0.778
因子間相関	2	0.413	0.292		
	3	0.157			
α		0.789	0.803	0.876	

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
a　5 回の反復で回転が収束しました。

子負荷量を示さなかった‘一人の友だちとばかり仲よくするよりもグループで仲よくしている’，‘友だちとは浅いつきあいしかしない’，‘友だちとは TV や音楽の話しかしない’，‘グループで一緒にいることが多い’，の 4 項目を分析から除外し，再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。回転前の 3 因子での累積寄与率は 58.677% であった。最終的な因子パターンと因子間相関を表 6 に示した。第 1 因子は‘友だちの考えていることに気を遣う’など 7 項目からなり，友人が嫌な思いをしないように気を遣う「中学生の気遣い」とする。第 2 因子は‘友だちに本当の気持ちを打ち明ける’など 4 項目からなり，友人に何でも話をする「中学生の深い関わり」とする。第 3 因子は‘ウケるようなことをよくする’など 2 項目からなり，友人を楽しませる「中学生の盛り上げ」とする。

学年や性別による特徴を見るために，学年（3 水準）×性別（2 水準）の 2　要因被験者間分散分析を行った。その結果，「中学生の深い関わり」における性別の主効果（$F(1,266)=11.404$, $p<.001$），「中学生の盛り上げ」における学年と性別の交互作用（$F(2,266)=4.754$, $p<.001$）が有意であった。「中学生の深い関わり」は男子より女子のほうが高いといえる。また，「中学生の盛り上げ」について単純主効果の分析を行ったところ，女子における学年の効果（$F(2,266)=5.469$, $p<.005$）と 2 年生における性別の効果（$F(1,266)=4.125$, $p<.05$），3 年生における性別の効果（$F(1,266)=12.952$, $p<.001$）が有意であった。Ryan's method による多重比較を行ったところ，女子では，1 年生よりも 3 年生のほうが「中学生の盛り上げ」が高いといえる。また，2 年生と 3 年生では男子より女子のほうが高いといえる。

3　対友人不安感情と友人関係の分析

対友人不安感情と現実の友人関係との関係を見るために，中学校・高校別に対友人不安感情を独立変数，現実の友人関係を従属変数，理想の友人関係を共変量とした，共分散分析を行った。全ての共分散分析において，共変量である理想の友人関係の回帰係数の値は有意であり，従属変数である現実の友人関係に効果を持つことが示されている。対友人不安感情は「拒否不安」，「疎外不安」，「不調和不安」それぞれ，項目得点の低いものから 30% を低群，高いものから 30% を高群，その間を中群とし，理想と現実の友人関係は各因子の平均項目得点を用いた。

①高校生における対友人不安感情と「深い関わり」の関係

「高校生の深い関わり」について，「拒否不安」（3 水準）×「疎外不安」（3 水準）×「不調和不安」（3 水準）の 3 要因共分散分析を行った結果，「疎外不安」の主効果が有意であった（$F(2,211)=3.341$, $p<.05$,）。表 7 に共分散分析の結果を示した。図 1 は各群の平均値を図示したものである。最小有意差による多重比較を行ったところ，低群＝高群＜中群であった。「疎外不安」低群や高群は，中群に比べてより友人と深く関わっていないといえる。

②高校生における対友人不安感情と「気遣い」の関係

「高校生の気遣い」について，「拒否不安」（3 水

表7　ペアごとの比較・「高校生の深い関わり」における「疎外不安」群の差

(I) 疎外群	(J) 疎外群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の95%信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	−0.229	0.127	0.072＋	−0.479	0.021
	低	0.135	0.168	0.425	−0.197	0.467
中	高	0.229	0.127	0.072＋	−0.021	0.479
	低	0.364	0.157	0.021*	0.054	0.674
低	高	−0.135	0.168	0.425	−0.467	0.197
	中	−0.364	0.157	0.021*	−0.674	−0.054

推定周辺平均に基づいた
*　＋p<．10, *p<．05, **p<．01
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

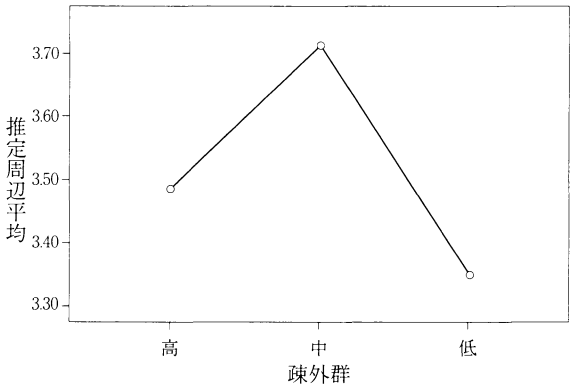

図1　「高校生の深い関わり」における「疎外不安」の群差

準）×「疎外不安」（3水準）×「不調和不安」（3水準）の3要因共分散分析を行った結果，「疎外不安」の主効果（F(2,211)＝2.572, p<.10）と「不調和不安」の主効果（F(2,211)＝2.443, p<.10）が有意傾向であった。表8・9に共分散分析の結果を示した。図2・3は各群の平均値を図示したものである。最小有意差による多重比較を行ったところ，「疎外不安」は低群＝中群<高群，「不調和不安」は中群<低群であった。「疎外不安」の不安感情が高い群ほど，友人に気を遣っているといえる。また，「不調和不安」の低群は，中群

表8　ペアごとの比較・「高校生の気遣い」における「疎外不安」群の差

(I) 疎外群	(J) 疎外群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の95%信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	0.173	0.101	0.089＋	−0.027	0.373
	低	0.298	0.139	0.034*	0.023	0.573
中	高	−0.173	0.101	0.089＋	−0.373	0.027
	低	0.125	0.126	0.321	−0.123	0.373
低	高	−0.298	0.139	0.034*	−0.573	−0.023
	中	−0.125	0.126	0.321	−0.373	0.123

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は.05水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

表9　ペアごとの比較・「高校生の気遣い」における「不調和不安」群の差

(I) 不調和群	(J) 不調和群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の95%信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	0.074	0.133	0.576	−0.187	0.336
	低	−0.149	0.139	0.287	−0.423	0.126
中	高	−0.074	0.133	0.576	−0.336	0.187
	低	−0.223	0.101	0.028*	−0.423	−0.024
低	高	0.149	0.139	0.287	−0.126	0.423
	中	0.223	0.101	0.028*	0.024	0.423

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は.05水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

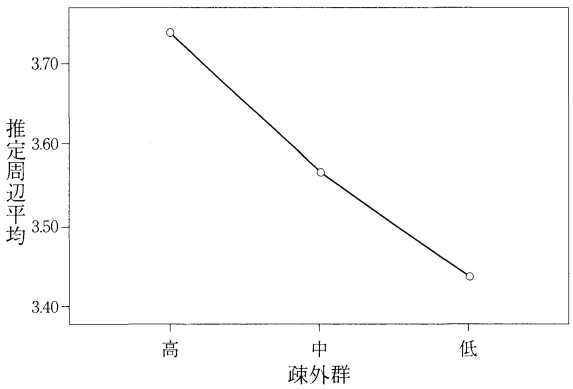

図 2　「高校生の気遣い」における「疎外不安」の群差

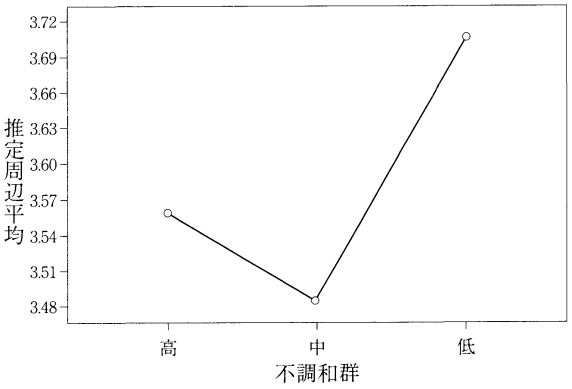

図 3　「高校生の気遣い」における「不調和不安」の群差

表 10　ペアごとの比較・「高校生の盛り上げ」における「不調和不安」群の差

(I) 不調和群	(J) 不調和群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の 95% 信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	−0.331	0.158	0.037*	−0.642	−0.020
	低	0.051	0.166	0.758	−0.276	0.378
中	高	0.331	0.158	0.037*	0.020	0.642
	低	0.382	0.122	0.002**	0.142	0.623
低	高	−0.051	0.166	0.758	−0.378	0.276
	中	−0.382	0.122	0.002**	−0.623	−0.142

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は .05 水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

表 11　ペアごとの比較・「高校生の群れ」における「不調和不安」群の差

(I) 不調和群	(J) 不調和群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の 95% 信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	−0.324	0.182	0.077＋	−0.683	0.035
	低	−0.004	0.193	0.984	−0.385	0.377
中	高	0.324	0.182	0.077＋	−0.035	0.683
	低	0.320	0.142	0.026*	0.039	0.601
低	高	0.004	0.193	0.984	−0.377	0.385
	中	−0.320	0.142	0.026*	−0.601	−0.039

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は .05 水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

より友人に気を遣っているといえる。

③高校生における対友人不安感情と「盛り上げ」の関係

「高校生の盛り上げ」について，「拒否不安」（3 水準）×「疎外不安」（3 水準）×「不調和不安」（3 水準）の 3 要因共分散分析を行った結果，「不調和不安」の主効果が有意であった（$F(2,211)=5.596$, $p<.005$）。表 10 に共分散分析の結果を示した。図 4 は各群の平均値を図示したものである。最小有意差による多重比較を行ったところ，低群＝高群＜中群であった。「不調和不安」の低群や高群は，中群よりも友人関係において盛り上げていないといえる。

④高校生における対友人不安感情と「群れ」の関係

「高校生の群れ」について，「拒否不安」（3 水準）×「疎外不安」（3 水準）×「不調和不安」（3 水準）の 3 要因共分散分析を行った結果，「不調和不安」の主効果が有意であった（$F(2,211)=3.172$, $p<.05$）。表 11 に共分散分析の結果を示した。図 5 は各群の平均値を図示したものである。最小有意差による多重比較を行ったところ，高群＝低群＜中群であった。「不調和不安」の高群や低群は，中群よりも友人関係において群れていないといえる。

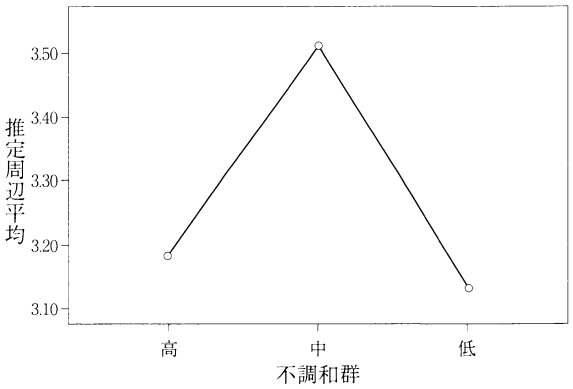

図4　「高校生の盛り上げ」における「不調和不安」の群差

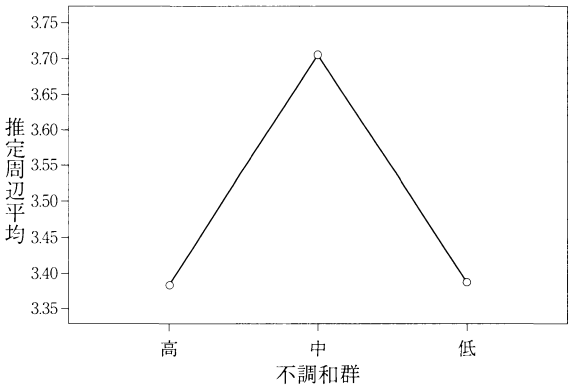

図5　「高校生の群れ」における「不調和不安」の群差

表12　ペアごとの比較・「高校生の浅い関わり」における「疎外不安」群の差

(I) 疎外群	(J) 疎外群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の95%信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	0.101	0.106	0.341	−0.108	0.310
	低	−0.288	0.142	0.044*	−0.568	−0.008
中	高	−0.101	0.106	0.341	−0.310	0.108
	低	−0.389	0.135	0.004**	−0.655	−0.123
低	高	0.288	0.142	0.044*	0.008	0.568
	中	0.389	0.135	0.004**	0.123	0.655

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は .05 水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

表13　ペアごとの比較・「高校生の浅い関わり」における「不調和不安」群の差

(I) 不調和群	(J) 不調和群	平均値の差	標準誤差	有意確率 (a)	差の95%信頼区間 (a)	
					下限	上限
高	中	−0.052	0.144	0.717	−0.337	0.232
	低	0.254	0.152	0.096＋	−0.046	0.553
中	高	0.052	0.144	0.717	−0.232	0.337
	低	0.306	0.110	0.006**	0.089	0.523
低	高	−0.254	0.152	0.096＋	−0.553	0.046
	中	−0.306	0.110	0.006**	−0.523	−0.089

推定周辺平均に基づいた
*　平均値の差は .05 水準で有意です。
a　多重比較の調整：最小有意差（調整無しに等しい）
b　修正グループ周辺推定平均値（I）
c　修正グループ周辺推定平均値（J）

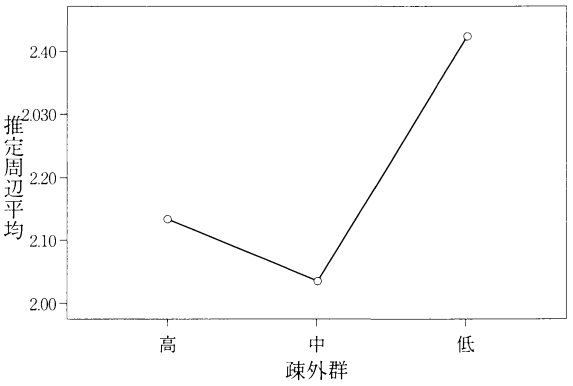

図6　「高校生の浅い関わり」における「疎外不安」の群差

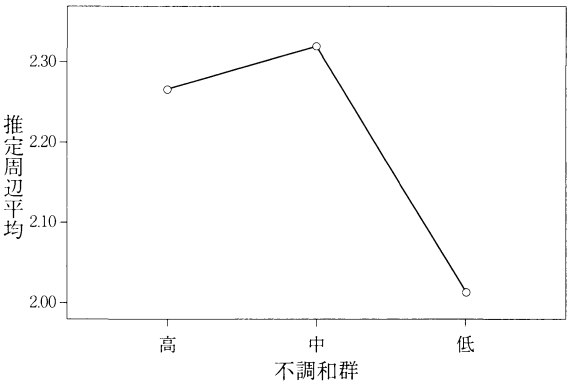

図7　「高校生の浅い関わり」における「不調和不安」の群差

⑤高校生における対友人不安感情と「浅い関わり」の関係

「高校生の浅い関わり」について，「拒否不安」（3水準）×「疎外不安」（3水準）×「不調和不安」（3水準）の3要因共分散分析を行った結果，「疎外不安」の主効果（$F(2,211)=4.170$, $p<.05$）と「不調和不安」の主効果（$F(2,211)=4.000$, $p<.05$）が有意であった。表12・13に共分散分析の結果を示した。図6・7は各群の平均値を図示したものである。最小有意差による多重比較を行ったところ，「疎外不安」は中群＝高群＜低群，「不調和不安」は低群＜高群＝中群であった。「疎外不安」の低群は，中群や高群より友人との関係を浅いものにとどめているといえる。また，「不調和不安」の高群と中群は，低群よりも友人との関係を浅いものにとどめているといえる。

⑥中学生における対友人不安感情と友人関係の関係

「中学生の気遣い」，「中学生の深い関わり」，「中学生の盛り上げ」について，「不調和不安」（3水準）×「疎外不安」（3水準）×「拒否不安」（3水準）の3要因共分散分析を行った結果，どれも有意な差は見られなかった。

考　　察

1　対友人不安感情について

本研究での対友人不安感情は，松田（2003）の「拒否に対する不安」と「不調和に対する不安」に「すべてを見られることに対する不安」と「相手を傷つけてしまうことに対する不安」を加えた4因子を想定して作成したが，因子分析の結果は異なり，友人に拒否されることを恐れる「拒否不安」とグループの和を乱すことを恐れる「不調和不安」とグループからはみ出してしまうことを恐れる「疎外不安」という3つの因子が抽出された。自分が相手にどう思われるかということから起こる不安と，相手を気遣うことから起こる不安とがあるのではないかと考えていたが，今回の結果では見出すことができなかった。

落合・佐藤（1996）は，友人関係のあり方を発達的に調査している。青年期のはじめ，中学生では，「浅く広く関わる」つき合い方が多く見られるが，これは年齢が増すにつれて少なくなっていく。反対に，「深く狭く関わる」つき合い方が年齢を増すにつれて多くなっていき，大学生で多く見られる。そして，このようにつきあい方が転換していく途中，高校生の頃に，「深く広く関わる」つき合い方が多くなることを見出されている。このように，友人とのつき合い方が変化していくということは友人に対して感じる不安の内容も変わっているのではないかと考えられる。落合・佐藤（1996）の友人関係の発達的変化に当てはめてみると，今回調査を行った中学生や高校生は，まだ広いグループでつき合っている段階である。そのため，相手から拒否されることや，仲間の和を乱すことに対する不安感情が抽出されたのではないかと考えられる。友人を限定して，狭くつき合うつき合い方をするようになる大学生を対象に調査を行うと，最初に想定していた，相手を気遣うことから起こる不安感情も見出されるかもしれない。

予備調査，本調査の中学生，高校生とそれぞれで似たような3つの因子が抽出されたが，項目の内容を見てみると，必ずしも全く一緒であるとはいえない。もともと因子間の相関が高いためであると考えられる。また，中学生と高校生の対友人不安感情の項目を見ると，中学生では「拒否不安」に‘友達と一緒に盛り上がっていないとかげぐちを言われてしまう気がしてこわい’や‘でしゃばりすぎると友だちの反感をかうと思う’のような「不調和不安」と考えられる項目が入っていたり，「不調和不安」に‘遊びに誘うとき，断られるかもしれないと気になる’や‘連絡を取るとき，友だちにうっとうしいと思われないか気になる’のような「拒否不安」と考えられる項目が入っているなど，2つの因子が交じり合っているようだが，高校生ではその2つが上手く別れている。中学生ではまだ漠然とした友人に対する不安であるものが，高校生になると‘拒否されたくない’や‘場の雰囲気を壊したくない’などとはっきりとした内容の不安が感じられるようになってくるのではないかと推察される。堀井（2002）によると，対人不安意識は全般的に中学生から高校生にかけて上昇しているようである。また不安の内容も，中学生では未分化であったものが，高校，大学と発達するにつれて具体的な側面に分化していく。対人不安意識と同様に，友人に対しての不安感情も，中学生ではまだ漠然としか意識されていないものが，高校生でははっきりと意識されるようになっているのではないかと考えられる。

また，性別の差について有意な差が見られたのは，高校における「不調和不安」だけであった。これは松田（2003）の中学生における結果とは反対で，女子よりも男子のほうが高かった。中学生から高校生にかけて様々な変化が起こる中で，友人関係の理想も変わり，さらに友人に対する不安感情も変化したのではな

いだろうかと考えられる。中学生から高校生だけではなく，さらに大学生へと成長する中でも大きな変化の波がある。その時にも，友人関係に関する理想や友人に対する不安感情の変化があるのではないだろうか。大学生の持つ友人に対する不安感情についても検討をする必要があると考えられる。

しかし，仮説のように学校や性別によるはっきりとした違いは見出せなかった。世代間や性別による特徴だけではなく，個人内の特徴も大きいのではないだろうかと考えられる。発達的な1つの変化があるというものではなく，特性的な不安の感じやすさなどもあるのではないだろうか。そのことを検討するためにも，中学生・高校生の対友人不安感情の特徴の違いだけでなく量的変化についてや，調査対象を大学生にまで広げたり，対人不安傾向とも関連させるなど，さらに調査を進めていく必要があると思われる。

2　友人関係について

今回使用した友人関係尺度は友人と深くつき合う関係である「深い関わり」と友人に対して気を遣ってしまう「気遣い」と大勢で一緒に行動することを好む「群れ」の3因子を想定して作成されているものである。主に大学生を対象として，現実の友人関係を調査するために使用されているが，松田（2003）の調査により，中学生を対象としても，「群れ」の因子が「群れ」と「盛り上げ」の2つに分かれたが，その他は似たような因子が抽出されることが示されている。今回，その質問紙を使って理想と現実，両方の友人関係を調査したが，因子分析の結果を比較すると，どちらも同じような因子が抽出されているといえる。高校生では，「深い関わり」と「気遣い」の因子において，理想では削除した項目がいくつかあるが，内容を見ると同じものを指していると考えられる。中学生でも，「気遣い」の因子において，理想では削除した項目が1つだけあるが，こちらも内容を見ると同じものを指していると考えられる。また，中学生，高校生共に「深い関わり」が理想でも現実でも男子より女子のほうが高く，高校生では「浅い関わり」が理想と現実どちらも女子より男子のほうが高かった。このように，中学生でも高校生でも理想の友人関係と現実の友人関係は類似している。友人とどのようにつき合いたいかという理想が，実際に友人とどのような関係を築くかという現実に影響を与えていることが考えられる。

しかし，中学生と高校生の間で比較すると，高校生のほうがより細分化された内容が抽出された。先にも述べたが，落合・佐藤（1996）の友人関係の発達的変化に当てはめてみると，高校生は友人関係のあり方が変容する真っ只中の時期である。そのため，理想の友人関係も大きな3つの枠では捉えきらずに，より細分化されたのではないかと考えられる。高校生において，友人と深くつき合いたいという「深い関わり」と友人とあまり深くつき合いたくないという「浅い関わり」が同じ因子の両極にあるのではなく，全く別のものとして抽出されている。高校生は友人関係のあり方からしても不安定な時期であるし，発達的にもとても多感な時期である。友人と深く関わりたいという思いや，でもあまり関わりすぎたくないというような複雑な心情が表現されているのかもしれない。岡田（2002）によると，現代青年の友人関係の特徴として，自分の内面を開示するような関わり方を回避し，表面的な楽しさの中で群れる一方で，互いを傷つけないように，互いの内面に踏み込まないように気を遣いながら関わることが指摘されており，これが「ふれ合い恐怖」の特徴と共通しているといっている。高校生の理想の友人関係の中の「群れ」と「浅い関わり」は，特に男子に高かった。彼らはこのような指摘の青年の予備軍であるといえるのではないだろうか。そうであれば，「ふれ合い恐怖的心性」の性差は男子のほうが高いことなどが予想される。しかし，今回は高校生の被検者の大半が1年生である。そのため，高校生全般について明らかになったわけではない。理想の友人関係についても，他の学年に関してもさらに調査をすることや，質問紙ではなくインタビューにしてみること，小学生にも調査可能かなど，さらなる検討が必要であると思われる。

3　対友人不安感情と友人関係との関係

対友人不安感情と友人関係との関係は，対友人不安感情が高い者ほど深く関わるつき合い方をしにくくなったり，友人に対する気遣いや群れるつき合い方をすると考えていた。しかし，「疎外不安」や「不調和不安」などグループ内での自分に関する不安感情はそうではない示された。対友人不安感情が高いと，深く関わったり友人を楽しませるといったグループでの友人との関わりを築きにくくなるというだけでなく，反対に低いということと友人との関わりを避けることにも関連が見られた。

「疎外不安」の中群に比べて，高群や低群はあまり深く関わるつき合い方をしていない。また「不調和不安」の中群に比べて，高群や低群は友人たちを盛り上

げるような行動をとったり，グループで群れたりしていない。外山（1997）によると，青年期は集団に強く引きつけられる側面と，その影響力に反発する側面の両方が混在している。集団の重要性が増し，集団からの影響力が大きくなる時期である。集団の規範に従おうとする傾向や，周囲の人々の行動や態度に注意を払い，自分の行動や態度と比較しようとする傾向が顕著になり，規範からの逸脱行動に対する集団からの非難や制裁も強くなりがちである。また，自己のアイデンティティを確立する時期でもあり，他者とは異なる自分の個性を主張したいという欲求も強くなる。このような欲求は，他者から遠ざかって孤立したり，リーダーや権威者からの影響力に反発する傾向を招き，集団の求心力を弱める作用をする可能性もある。前者の意識が強い者は，「疎外不安」や「不調和不安」が高く，自分の行動や発言によって友人から疎外されてしまうかもしれない，グループの和を乱してしまうかもしれないという不安ばかり先走って身動きがとれず，深く関わったり友人を楽しませるといった友人との関わりを築きにくくなってしまっているのではないかと考えられる。後者の意識が強い者は，「疎外不安」や「不調和不安」が低く，自分の行動や発言によってグループから疎外されてしまうかもしれないと友人の反応を気にしたり，自分の行動や発言がグループの和を乱してしまうのではないかと気にしたり，どんな行動や発言でグループの調和が保たれるのか考えるなど，グループのことで思い悩むことがあまりなく，深く関わったり友人を楽しませるといった友人との関わりよりも自分の意志や個性を大事にしているのではないかと考えられる。

このことから，対友人不安感情が低いということは，友人との関わりに対する関心の薄さとも関連しているのではないかと考えられる。友人にどう思われているのか，自分の行動に対してどのような反応が返ってくるのかといったようなことを気にする不安感情は，友人との関わりを持つ上で必ずついてまわるものである。ある程度の不安感情を感じることで，友人に対する自分の行動や発言を考えているのであろう。碓井（2000）は，青年期には友人関係の中で不安を感じることもあるが，その不安や葛藤が成長のきっかけとなったり，友人関係を強めたりするといっている。対友人不安感情は低ければよい，高ければ悪いというものではなく，程よく感じていることで友人との関わりも成立していくものであるといえる。

このように，対友人不安感情の高低によって友人関係のあり方も違ってくることが考えられる。しかし，対友人不安感情が低い者において，友人との深い関わりを望まないため，対友人不安感情も低いのではないかという逆の影響も示唆される。対友人不安感情と友人関係のあり方についてモデルを構築するためには，さらなる検討が必要であると思われる。

①高校生における「疎外不安」と友人関係のあり方について

「疎外不安」が低い群は，他の群に比べて，「深い関わり」や「気遣い」が低く，「浅い関わり」が高かった。グループからはみ出てしまうことへの不安感情が低く，友人との集団での関わりにあまり関心を持っていないのではないだろうか。そのため，友人と深く関わったり，関係を良いものにするために相手に対して気を遣うという行動が少なく，友人との関わりを浅いものにとどめているのではないかと考えられる。

「疎外不安」の中群は，他の群に比べて，「深い関わり」が高く，「気遣い」や「浅い関わり」が低かった。グループからはみ出したくないという思いも感じているが，それほど強くはないようである。そのため，相手に対して気を遣うということはしなくても，グループからはみ出してしまうのではないかという心配をせずに，程よくリラックスして友人との内面的な深い関係も築くことができているのではないかと考えられる。

「疎外不安」の高い群は，他の群に比べて，「深い関わり」や「浅い関わり」が低く，「気遣い」が高かった。グループからはみ出してしまうのではないかという恐れが強いために，あまり友人に内面を見せることが出来ずに気を遣っている。しかし，仲間外れにはなりたくないので，はみ出さないように気を遣いながら集団の中には所属しているのではないかと考えられる。

②高校生における「不調和不安」と友人関係のあり方について

「不調和不安」の低群は，他の群に比べて，「気遣い」が高く，「盛り上げ」，「群れ」，「浅い関わり」が低かった。グループの和を乱してしまうのではないかという不安の低い者は，グループで関わることへの関心も低いのではないだろうか。そのため，友人と群れたり，グループ内を盛り上げようという行動も少ないのではないかと考えられる。しかし，友人との関係を浅いものにしたいということではないのであろう。集団ではなくて，個人的につき合うことを好むため，その相手に対してはよく気を使うのではないかと考えら

れる。

「不調和不安」の中群は，他の群に比べて，「気遣い」が低く，「盛り上げ」，「群れ」，「浅い関わり」が高かった。グループ内の和を乱すことを程よく気にしているため，みんなで群れ，そのグループを盛り上げようという行動をするが，みんなで一緒にいて，ウケる話をするだけにとどまる浅いつき合いになっているため，相手に対する気遣いもあまりないのではないかと考えられる。

「不調和不安」の高群は，他の群に比べて，「気遣い」，「盛り上げ」，「群れ」が低く，「浅い関わり」が高かった。グループ内の和を乱してしまうことへの恐れがとても高いため，グループ内の空気によく気を遣い，楽しませようと盛り上げるが，それはその場限りの関係で，深くつき合う関係ではないのではないかと考えられる。

③高校生における「拒否不安」と友人関係のあり方について

「拒否不安」については，どの友人関係のあり方にも有意な差は見られなかった。拒否されることへの不安が高いほど，友人と深く関わったり，友人と群れたり，そのグループ内で楽しませたりという行動は少なく，相手に気を遣ったり，浅いつき合いにとどめてしまう傾向にあるようだが，有意な差ではなかった。「拒否不安」は自分が相手に拒否されてしまうのではないかという不安感情である。高校生は，自分とは何か，将来はどうするのかなどと考え，アイデンティティの確立に向けて悩みだす時期である。そういった敏感な時期である高校生にとって，「拒否不安」はみんな同じ程度感じている不安感情ではないだろうか。そのため，群による差が見られなかったのではないかと考えられる。

また，対友人不安感情の3つの交互作用にも有意な差が見られなかった。その原因の1つとして，これら3つの因子は，特に「拒否不安」と「不調和不安」は因子間の相関が高いということがあげられる。1つの不安感情は高い者は他の不安感情も高い，低い者は他の不安感情も低いというように，それぞれの因子間の相関が高いために，有意な交互作用が見られなかったのではないかと考えられる。

④中学生における対友人不安感情と友人関係のあり方について

中学生における対友人不安感情と友人関係のあり方については，どれも有意な差は見られなかった。中学生は，対友人不安感情自体がまだ漠然としか感じていない時期であると考えられる。そのため，友人関係のあり方に影響を及ぼすような差は見られなかったのではないかと考えられる。中学生は，小学生の頃のような，遊びのための仲間集団としての友人関係のあり方から，内面的な交流を含んだ友人関係のあり方に変化したばかりの時期である（碓井，2000）。これから，様々な友人の内面に触れる関係を築いていき，友人に対する不安感情も生まれてきているのではないかと考えられる。そして，高校生頃になると，友人に対する不安感情をはっきりと意識しだし，現実の友人関係に影響を与えるようになるのではないかと考えられる。

結　　論

本研究では，中・高生を対象とした対友人不安感情と理想の友人関係，現実の友人関係の調査を行った。その結果，対友人不安感情には，相手から拒否されることを恐れる「拒否不安」，グループからはみ出してしまうことを恐れる「疎外不安」，グループの和を乱すことを恐れる「不調和不安」が見出された。また，友人関係には，中学生では「気遣い」，「深い関わり」，「盛り上げ」の側面が，高校生では「深い関わり」，「気遣い」，「盛り上げ」，「群れ」，「浅い関わり」の側面が見出された。

グループ内での自分に関する対友人不安感情と友人関係との関係は，対友人不安感情が高いと，深く関わったり友人を楽しませるといったグループでの友人との関わりを築きにくくなるというだけでなく，反対に低いということと友人との関わりを避けることにも関連が見られた。対友人不安感情は，低ければよい，高ければ悪いというものではなく，程よく感じていることで友人との関わりも成立していくものであるといえる。

高校生において，「疎外不安」の高さは「深い関わり」，「気遣い」，「浅い関わり」に影響している。この不安の高い者は，関係を持ちたいが臆病になってしまい，低い者は集団や友人への関心もあまりないようである。ある程度不安を感じている者は，不安感情が友人に対する関心につながり，相手に関わる際に邪魔になることもなく，内面を見せあう深い関わりを持っている。

高校生において「不調和不安」の高さは「気遣い」，「盛り上げ」，「群れ」，「浅い関わり」に影響している。この不安の高い者は，友人と関わることを避けてしまい，低い者は集団での行動ではなく，個人的な

関係で相手に気を遣っているようである。ある程度不安を感じている者は，グループ内を盛り上げるムードーメーカの役割を果たしているが，表面的な関係にとどまっている。

高校生における「拒否不安」や中学生の対友人不安感情は，どの友人関係のあり方でも有意な差が見られなかった。「拒否不安」はみんなが同じ程度感じている不安ではないかと考えられる。中学生は，まだ対友人不安感情が漠然としたものであるため，現実の友人関係のあり方に有意な差が見られなかったと考えられる。

では，青年期後期にあたる大学生や，環境が新たに変化する社会人などは，どのような対友人不安感情を抱いており，それが友人関係にどのような影響を与えているのであろうか。また，小学生には友人に対する不安感情はないと考えてよいのだろうか。今後も対友人不安感情について発達的に検討していく必要があると思われる。

謝辞

最後になりましたが，ご協力くださった関西の中学校，高等学校の先生方ならびに生徒の皆さまに感謝いたします。

引用文献

榎本淳子　1999　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究　47, 180–190

榎本淳子　2000　青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連　教育心理学研究　48, 444–453

堀井俊章　2002　青年期における対人不安意識の発達的変化　山形大学紀要，13, 1, 79–94

松島るみ　2000　自己開示と青年の友人関係　展望　応用教育心理学研究第17巻

松田常美　2003　中学生における友人関係と不安感情の関連　甲南女子大学卒業論文

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，44, 55–65

岡田　努　1995　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究　43, 342–363

岡田　努　2002　現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究　10, 2, 69–84

杉浦　健　2000 2つの親和動機と対人疎外感との関係－その発達的変化－　教育心理学研究　48, 352–360

鈴木素子・寺嵜正治・金光義弘　1998　青年期における友人関係期待と，現実の友人関係に関する研究　川崎医療福祉学会誌　8, 1, 55–64

外山みどり　1997　現代史青年心理学［新版］　有斐閣　8章

角尾美奈　2003　対人不安傾向の再検討－不特定の他者に対する不安傾向と特定の他者に対する不安傾向－　東京家政大学研究紀要　43, 1, 167–173

角尾美奈　2004　不安が喚起される二者関係の分析　東京家政大学研究紀要 44, 1, 219–225

浮谷秀一・碓井真史　2000　青年心理学トゥデイ　福村出版　7章・8章

梅本信章　1988　友人関係期待と現実の友人　盛岡大学紀要　7, 71–80